



師富 省三さん
Morodomi Syozo

もろどみ・しょうぞう / 甲佐町副町長。平成20年4月に同職に就任し、平成24年4月まで4年間の任期を務める。4月から、同職に2期目の就任。

豊かな自然と人情を生かして 町民が主役となる町づくりを

「甲佐町の皆さんは情に厚く、人を受け入れてくれる氣質が豊か。人と人とのつながりが、非常に強くて熱い土地柄だと思う」と語るのは、甲佐町副町長の師富省三さん。

平成20年4月に同職に就任し、

今年4月から2期目。「町の夢と将来像を語って実現を目指す町長を支え、その実現のために、町職員と組織を横断的にまとめる役割」を担う新たな4年間の重責に、県職員として37年間勤務した経験を生かして臨む。

山鹿市（旧鹿央町）出身で、県職員時代も県北地域での勤務が長かった師富さん。「土地勘も何もなかった」「目線で感じた本町の第一印象を「熊本市から非常に近い場所にあるにも関わらず、山や川、新鮮な農産物など自然の豊かさを満喫できる地域」と振り返り、「地元だと当たり前すぎるのだが、外から来る人には魅力的に映るものが、この町にはもっと眠っているの

ではないか」と分析。「必ず人が集まる町になる」という思いから、町外からの新たな若い世代の住民を募る定住促進事業を重点的な施策の一つとして今後推進すべきと主張する。

副町長として町役場をまとめる立場から「町役場の組織力は大きいものがある。その力を適切に発揮することが、結果として本町の活性化につながる。職員一人ひとりが同じ方向を向いて、町長の抱く本町への思いを実現するために、お互いに知恵を絞りながら進まなければならない」と強く意識する師富さん。

「町も同じく一緒に、町民の皆さんにも、『町がどう進もうとしているのか、何に力を入れているのか。その中で自分たちは何ができ、何をすれば良いのか』という目標を共有していただき、その上で、『協働』という言葉に込められた町づくりを共に進めていければ」と提言。

「町民が主役となり、町役場は黒子となって活性化する町になれば、姿として一番理想的な町民の顔が見える距離感を大切にして、町づくりにさらに励みたい」と温和に語る。

広報 こうき

2012年（平成24年）5月号
通巻514号